



AET1 and AET2  
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB and Part II

---

Monday 12 June 2017 13.30 to 16.30

---

## **Paper J5**

### **Modern Japanese texts 2**

Answer **both** sections.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.

### **STATIONERY REQUIREMENTS**

*20 page answer booklet*

*Rough Work Pad*

### **SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION**

*None*

**You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.**

## SECTION A

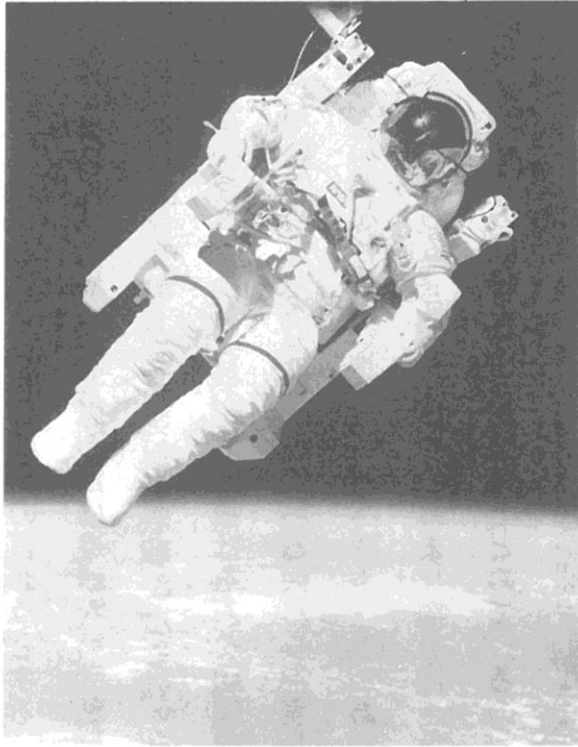
(1) Translate the following passage from an **unseen** text into English. The footnotes are for reference only. [40 marks]

私自身にまつわる一つの思い出話から始めよう。

小学校に上がって間もないころであった。私は通学途中で、できたばかりの二人の友達に、宇宙へ出てしまえば私たちがふつう考えているような「上」とか「下」とかは意味がなくなってしまうのだということの説明しようとした。などと言うと、いかにも早熟で想像力豊かな子供だったように聞こえるかもしれないが、実は、親から知識としてそのように聞かされていたことをただ受け売りしただけである。

今でこそ子供は、NASAの映像やアニメーションや絵本やおもちゃを通じて、「宇宙」という非日常的な概念や無重力状態という不思議な状態のことが当たり前の情報として伝えられる環境の中に置かれている。彼らは既に幼児期からそういう事実をそういう事実として受け取っているかもしれない（感覚としてそうすんなりと

Question 1 continued...



宇宙遊泳 ©NASA

理解できているとは思えないが)。  
しかし私が小学校に入学したのは、一九五四年である。当時は、人工衛星もまだ飛んではいなかったし、テレビも普及していなかった。だから、そうした日常生活から遊離したようなテーマが、これくらいの年齢の子供の間で、自然に語られる話題として流通することはほとんどあり得なかった。その意味では、私がそんなことを話題にしたこと自体、少々エキセントリックだったとは言えるだろう。

私は、この聞きかじったばかりの「ホットな知識」をなんとか友達に伝えようと懸命になった。

(中略)

(TURN OVER)

ところが悪いことに、友達は、私の言おうとすることをまともに聞こうとしなかった。変なことを言うやつだと思ったに違いない。私はつたない言葉で「うちゅうへいってしまえばどっちが上でどっちが下かなんていうことはなくなるんだ。」と何度も繰り返して言ったのだが、やがて彼らはそんな頑固な私にうんざりしたのか、私のことをからかい始めた。空と地面を代わる代わる指差しながら、大きな声で「上があつて下があるじゃないか！ ハッハッハッ！ 上があつて下があるじゃないか！」とはやし立てたのである。私は悔しさのあまり物も言えなくなってしまった。

(中略)

そもそもどうして私は、当時のこの年齢にはふさわしいと思えない「宇宙」についての話題などを、それも殊更理屈っぽい仕方友達に提供しようとしたのだろうか。恐らく、大げさに言うなら、「宇宙へ出れば上も下もない」というこの「問題」が、七歳という年齢における私の心にとって、何か重要な意味を持つ「大問題」としてと

Question 1 continued...

らえられていたのだ。つまり、親から知識として与えられたその事実が、私自身の日常感覚を激しくぐらつかせるものであったのだ。それは、何か見知らぬ不気味なものに触れてきた子供が、半信半疑のままその模様を人に伝えようとするのに似ている。

私は友達との対決の場面では、いかにも、真理をあくまで主張する筋金入りの子供のように振る舞っている。親の断定は、自分が依存し信頼している人の断定であるがゆえに一つの絶対的な信仰のように私の中に植え付けられた。そしてそれを私はまるで、無神論者に向かって「神は存在する」と躍起になって主張するかのように友達に伝えようとしたのだ。

KOHAMA ITSUO, 'Uchū de ha ue mo shita mo nai?', in *NHK kōkō kōza Gendaibun* (2004), pp. 18-21.

(TURN OVER)

Question 1 continued...

Vocabulary list

早熟 precocious

受け売りする to tell something at second hand; to echo somebody's words

幼児期 子供のとき

人工衛星 artificial satellite

遊離する to be out of touch (with something)

聞きかじる to acquire a superficial knowledge (of something)

懸命 一所懸命

つたない inexpert, unskilful

うんざり to become fed up (with something)

地面 the surface of the earth

代わる代わる by turns

指差す to point (at something)

はやし立てる to make fun of

悔しさのあまり in the excess of one's frustration; as one was too frustrated

殊更 特に

理屈っぽい argumentative

大げさに in an exaggerated way

ぐらつかせる to make something shake

不気味 weird

半信半疑 a doubting state of mind

模様 様子

対決 confrontation

筋金入り hard-core

断定 assertion

依存 reliance

信頼 trust

## SECTION B

Translate **two** of the following passages from **seen** texts into English [30 marks each]

(2)

言葉には力の序列がある。  
一番下には、その言葉を使う人の数がきわめて限られた、小さな部族の中でしか流通しない言葉がある。その上には、民族の中で通じる言葉、さらにその上には、国家の中で流通する言葉がある。そして、一番上には、広い地域にまたがった民族や国家のあいだで流通する言葉がある。

今、人々の間の交流が急激にさかんになったことによって、言葉に有史以来の異変が二つおこっていると言われている。

一つ目の異変は、下の方の、名も知れぬ言葉が、たいへんな勢いで絶滅しつつあるということである。今地球に六千ぐらいの言葉があるといわれているが、そのうちの八割以上が今世紀の末までには絶滅するであろうと予測されている。歴史の中で、あまたの言葉が生まれては消えていったが、今、言葉は、生まれるよりも勢いよく消えつつある。激しい環境の変化の中で、自然界ではありえなかった勢いで生物が絶滅しつつあるのと同様、都市への人口集中や伝達手段の発達や国家の強制によって、言葉は、かつてない勢いで消えつつある。

二つ目の異変は、今までには存在しなかった、すべての言葉のさらに上にある、世界全域で流通する言葉が生まれたということである。

それが今〈普遍語〉となりつつある英語にはかならない。

英語がほかの言葉を押しのけて一人〈普遍語〉となりつつあるのは、歴史の偶然と必然とが絡み合っていることである。英語という言葉そのものに原因はない。思うに、英語という言葉は、ほかの言葉を〈母語〉とする人間にとって、決して学びやすい言葉ではない。もとはゲルマン系の言葉にフランス語がまざり、ごちゃごちゃしている上に、文法も単純ではないし、そもそも単語の数が実に多い。慣用句も多い。おまけにスペリングと発音との関係がしばしば不規則である。さらに、発音そのものが、それを〈母語〉としない多くの人にとって非常にむずかしい。

MIZUMURA MINAE, *Nihongo ga horobiru toki* (2008), PP. 48-49.

(TURN OVER)

(3)

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微<sup>16</sup>していた。今この下人が、永年使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから、「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも、「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた。」

と言うほうが、適当である。その上、今日の空模様も、少なからず、この平安朝の下人の sentimentalism<sup>17</sup>に影響した。申<sup>18</sup>の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何を措<sup>19</sup>いてもさしあたり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門を包んで、遠くから、ざあつという音を集めてくる。夕闇<sup>20</sup>はしだいに空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した藁<sup>21</sup>の先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならないことを、どうにかするためには、手段<sup>22</sup>を選んでいるいとまはない。選んでいれば、築土<sup>23</sup>の下か、道ばたの土の上で、飢え死にするばかりである。そうして、この門の上へ持つてきて、犬のように棄てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊<sup>24</sup>したあげくに、やっとこの局所<sup>25</sup>へ逢着<sup>26</sup>した。しかしこの「すれば」は、いつまでたつても、結局「すれば」であった。

AKUTAGAWA RYŪNOSUKE, 'Rashōmon', in *NHK kōkō kōza Kokugo sōgō* (2004), pp. 152-53.



(4)

日本語の作家として、初めてこの場所に立った川端康成は、『美しい日本の私』という講演をしました。それはきわめて美しく、またきわめてあいまいなものでありました。私はいま vague という言葉を使いましたが、それは日本語でのあいまいなという形容詞にあてたものです。それをここで念を押したいのは、あいまいなという日本語を英語に訳す場合、いくつもの訳語が考えられるからです。川端が、おそらく意識して選んだあいまいさは、その講演のタイトルがあらかじめ示していました。それは日本語で「美しい日本の」という、その助詞「の」の機能によっているのです。

まずタイトルは、「美しい日本」に属する私、を意味します。また「美しい日本」と私を、同格に提示しているとも受けとれます。さらに川端の翻訳者であるアメリカ人の日本文学研究者による英訳、“Japan, the Beautiful, and Myself”は、それをあらためて普通の日本語へ戻すとすれば「美しい日本と私」でしょうが、だからといってさきの練達の英訳者が、かならずしも裏切り者としての翻訳者トランスレーターとはいえないのです。

右のタイトルのもとに、川端は、日本的な、さらには東洋的な範囲にまで拡がりをもたせた、独自の神秘主義を語りました。独自の、というのは禅の領域につながるということで、現代に生きる自分の心の風景を語るために、かれは中世の禅僧の歌を引用しています。しかも、おむねそれらの歌は、言葉による真理表現の不可能性を主張している歌なのです。閉じた言葉。その言葉がこちら側につたわって来ることを期待することはできず、ただこちらが自己放棄して、閉じた言葉のなかに参入するよりほか、それを理解する、あるいは共感することはできないはずの禅の歌。

ŌE KENZABURŌ, *Aimai na Nihon no watashi* (1995), pp. 4-5.

END OF PAPER

Page 9 of 9